

入選 宮崎県 寺田 定子 様（50代 女性）

八十三歳になる一人暮らしの母が、肺炎を起こし入院したのは、底冷えのする3月の終わりのことだった。風邪がなかなか抜けず一人でかかりつけの医院を受診し、検査の結果、入院設備のある病院を紹介されたとのこと。

仕事を抜け出し、慌てて迎えに行くと、母はひっそりとした待合室で小さく背中を丸めていた。

すぐに入院となり一週間ほどの点滴治療で回復するはずが、なかなか思うようにならず、発熱を繰り返し、とうとうまったく食事を摂らなくなってしまった。

当然、体力も落ち、起き上がることもままならず、つい二週間前まで家事を一切自力でやっていたとは思えないほどに衰弱していった。近くに娘が四人もいながら、「まだまだ気を使いたくない、大丈夫」という母の言葉を鵜のみにして気遣いをしてやれなかったことをひどく後悔した。

退院したら同居をしないかと持ちかけたのは、もしかしたらこのまま、母と別れることになるのではと、不安がよぎったころであった。

気弱になっていたのか、そうしたいとの意外な答えが返ってきた。

母がそれまで住んでいた公営住宅を引き払い、狭い我が家に母の居室をしつらえ、さまざまな手続きを行い何とか同居できる体制が整うのに一週間もかからなかった。少しでも早く、そして長く安心できる暮らしをさせてあげたかったからだ。

しかし、依然として病院の食事を受け付けないので、主治医に無理を言い通院に切り替えてもらう事とし、母との同居が始まった。

不思議なもので、退院すると、あれだけ喉を通らなかった食べ物を徐々に受け付けるようになり、だんだん足取りもしっかりしてきた。

目の輝きもいきいきとし、ほっと胸をなでおろしたものだ。

実は同居するにあたり、私には経済的な心配もあった。家族が一人増えるとなると、やはりそれなりの出費がある。

介護用品、通院のための交通費、デイサービスの費用、生活費等、なかなかの金額だ。

しかし、母はわずかながら年金を受給している。

私達が幼いころに父が他界し、母は女手ひとつで必死に働き私達を高校まで通

わせてくれた。

その時に加入していた年金のおかげで母一人の介護費用や生活費は、まかなえそう。

余裕はないが、時々買い物に連れて行き母の好物や、気に入った洋服を買うこともできる。一人暮らしの頃には、財布と相談しながら、注文していた共同購入のカタログを楽しそうに眺め、マークシートに記入する姿を見て幸せを感じるこの頃である。

母の苦労が実を結び、安心して暮らせ、また私には親孝行のチャンスを与えてもらったと年金制度には感謝している。

